



何という題名であろうか、増岡啓彰という男。今年8月18日大会出張先のホテルで千葉全中大会で会議出席のための準備中、異変を感じそのまま倒れて2時間（推測）……。息を吹き返すことはなく62歳の人生を閉じた。

2020東京オリンピック大会の記念の皿杯の中心に名前がある。まさに飛び込み競技をまとめ、飛込日本が一大目的に進んだ時期のリーダー的な存在であった。大会は延期になり2021年7月24日から8月7日まで東京アクアティクスセンターで行われた。

競技大会で私たちはSV（スーパーバイザー）として大会運営に協力していた。我々の仕事というと競技が始まるまでの準備ということで競技会が始まるとどこかへ雲隠れをする、とにかくTVに映ってはいけないという存在であった。私と増岡は、時間的に合えば一緒にホテルまで帰ってTV観戦をしていた。ある日、増岡はどうにかして実際の試合をみてみたいという念いで観客席の飛び込み委員会が設置した遅延TVのカメラのところに座り、いかにも役員で「工作中でございます。」……。次の日実際にみてすごく感動していたのを覚えている。とにかく初めてオリンピックというものを観戦したと熱く、熱く語ってくれた。

昭和53年（1978年）日本体育大学。入学当時いつもにこにこ顔の当人、本人は笑っているつもりはなく、そう見えてしまうものだから始末が悪い。ある日、先輩から集合（正座して反省と称して怒られる）がかけられ、正座している最中もにこにこ顔であった。万事休す。

とはいっても増岡は石川県で競泳自由形のチャンピオンである。かつてはその名を北陸方面？にとどろかせたのである。自分はというと鳥取県で競泳はやってはいたがチャンピオンどころか〇位であった。私の一番の誇りは小学生時代の綾女知廣先生の口車に上手く乗せられ水泳、水泳っという感じで踊っていたことであった。50Mクロールは何秒、平泳ぎ何秒、バタフライ何秒、背泳ぎ何秒、これらを足したら200M個人メドレーで・・・ほら新記録！・・・これらの記録はベスト記録である。

そんなベストな記録が続くわけがないのであるが当時小学生で県で8位という記録であった。話がそれたがとにかく増岡と私は体つきも身長もよく似ていた。違うといえば顔つきぐらいであった。



毎日の練習で寮からプールまでの道のりにも思い出がある。すべては自分の憶測なのだが2人して寮を出て歩いている。「昨日の練習は上手くいったから、今日も先を歩こう」という心の声に背中を押されて足が進んでいたように思う。入学した当時は新入生5人であったが経験者がまず離脱し残された4人は初心者であった。そこからスタートした、その後ほかの2人は学生コーチになり部員を支えてくれた。実際に飛んでいるのは増岡と私の2人だけとなった。時には自然とライバル意識が芽生えることもあり、時には同僚の仲間同士であった。3年になり自分は学生連盟の係として、増岡は飛び込み部のキャプテンとして頑張っていた。

ある日、栄養会なるものがあった。(監督、コーチ、学生すべて集まって肉を焼いて食べる)アルコールも多少許される、ほろ酔いになった監督が押し入れで寝ていた。そのことに怒ったもう一人の監督がキャプテンの増岡に湯を入れられた。

その日、同じ部屋であった我々は寝床で「キャプテンでやっていけないよ」「どうしているのかわからないよ」と涙混じりに私に訴えた言葉に「大丈夫だよ。支えて行くから。」と答えるのがやっとであった。

大学を卒業してからは、上京するにあたってできる限り連絡を取り合って会う機会をもうけた。そのとき帰りに駅まで送ってもらうときに、一人の女性も同乗してきた、当時、日本体育大学の後輩の「加谷ちゃん」とよぶ女性であった。この人と結婚するんだなと直感で思ったのだ。そういうことにしておきましょうね!・・・奥さん。

8月18日、私は長野インターハイ審判員としての役職を全うしてからその足で増岡の自宅のある横浜にお邪魔しようと思っていた。でも同時期、神奈川県はコロナウイルスの緊急事態宣言下に置かれていたのと帰路のフライト時間のこともあり、はせ参じることをあきらめた。OB会にお願いして任を委ねた。

その後コロナも治まりつつあった、まん延防止等重点措置が終了となったのは9月30日であった。同級生と連絡を取り合って11月20日に焼香のため横浜に集まろうと話がまとまった。奥さんにも了解を取ったさい、新横浜のホテルに迎えに来ていただけるようになった。午後、話は盛り上がるも、皆それぞれが笑顔を絶やさなかった。

その日の夕食、米子ダイビングチームの一員であった美甘真己君も合流して楽しい雰囲気

気が漂った。実は美甘君、横浜に住んでいてこの店の予約も彼がしてくれた。話が進む中で今度、増岡のお墓にある霊園前が彼の散歩コースになっていてすごく近いらしいとの話題になった。次の日スマートフォンのメールでその写真を送ってきてくれた。頼もしい現地サポート員だ。別れ際、奥さんが涙を流された。

写真のことを奥さんに連絡した。返信には「これでオットさんもさみしくないですね」と返事が返ってきた。仏壇の増岡の顔から笑顔は消えることはない。～合掌～

